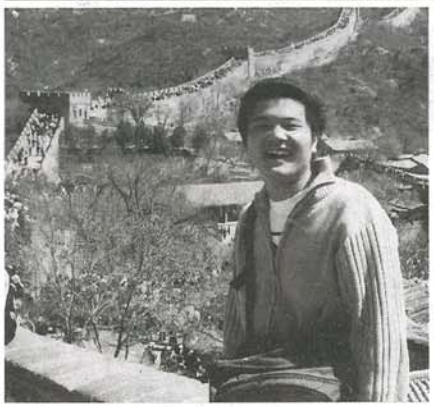

日本歯科新聞
2013年
3月5日
＜発行所＞
日本歯科新聞社

# 世界で活躍する サムライ技工士

## 中国・上海
## 齋藤 芳文 氏 ①

# 訪中1週間で中国での仕事決意

「ニーハオ！」中国で歯科技工士として働き始めて7年がたちます。

自分の会社の前で記念撮影

33歳　埼玉県出身
①日本での就業年数
　たぶん5年くらい
②海外にいる年数　7年半
③技工物は日本と比べて高いと思うか安いと思うか
「中国は日本に比べとても安いと思います。
上海の相場　PFM1本100元前後（1元=15円）　ジルコニア国産1本400元、欧米産900元　CoCr金属床フル完成600元前後　ノンクラスプデンチャー1床1歯120元前後」

渡中のきっかけは東京の某有名な営業会社から依頼された、2004年7月の中国出張でした。それまでは中国の歯科技工や文化、言語の知識は何一つ持ち合わせていなかったのです。出張の滞在期間はたったの1週間でしたが、そこで多くのものに触れ、日本では味わえないカルチャーショックを経験し、中国は面白くなると直感、この時に「この国で技術を持ち、中国語の話せる日本人歯科技工士になろう」と決心しました。

中国に来る前の01年7月、アメリカに2カ月ほど滞在し、ポーセレンワークの研修をしました。しかし、その時は新米歯科技工士で、良い物を作るには人の指導が必要な状態でした。海外でやっていくには人に負けないもの、自信が持てるものを最低限身につけていなければいけないと思い、帰国後、ポーセレンの前の基本的な技術を身につけるために院内ラボに転職し、自分が作った物が患者さんにどうセットされるのかを勉強しました。

そして3年後、自分が取り組んでいた技術の一つであるノンクラスプデンチャーが流行し、東京の歯科技工所の「ノンクラスプデンチャーができる人」の募集を見つけ、ラボに転職しました。それが04年の中国出張のきっかけとなり、駐在社員として中国・上海で歯科技工を始めることになったのです。

◆

上海の会社には僕を含めて日本人が4人（義歯2人、架工2人）いました。私はノンクラスプデンチャーをメーンに中国人スタッフを指導しながら一緒に作業をしていました。当時は中国語を話せなかったので、通訳を介して会話をしていましたが、中国人スタッフはモチベーションが高く、技術習得に非常に貪欲で、半年足らずで技術を習得して故郷に帰ってしまいました。そのため自分は会社に必要とされなくなり、帰国となりました。

㊤01年7月、アメリカ・シカゴにて仲間たちとベースボール（筆者は左上）
㊦06年5月、2回目の中国にて。北京万里長城

帰国後は、義歯だけではなく架工にも強くならなければとの思いから、「ポーセレンワーク」の面接で、まともにできもしないのに「できます」とサラッと言い張り、ポーセレンに触れられる環境へ移動しました。

ワックス、メタルワークから入り、慣れるまでは残業、徹夜、そんな毎日の繰り返しでした。仕事にも慣れてきた3カ月後、アメリカ行きのチャンスが再びやって来たのです。

「人手が足りないので、希望者がいればアメリカに行ってほしい」という話に、私は真っ先に「行きたいです！」と名乗り出て、アメリカ行きをゲットしました。

日本では仕事に追われ、普段やりたいこともできませんでしたが、アメリカはゆっくりと勉強ができる環境でした。仕事の終了後は築盛の勉強をさせてもらいました。しかし、最終目標は欧米よりも中国と決めていたので、アメリカではあくまでも勉強に集中し、必死でポーセレンワークを覚えました。

帰国後は、東京の会社で義歯とクラウンブリッジの仕事をやっていました。そして、06年4月に再び中国行きが決定。中国・上海では2度転職し、今は自分のラボを持つ日本人歯科技工士となっています。

（次号に続く）

---

# 交渉参加に「3条件」

## 日医がTPPで意見書

## 皆保険堅持を主張

日本医師会（横倉義武会長）は2月27日の会見で、T

における私的医療保険の拡大、投資分野における株式

首脳会談から帰国した数時間後に安倍首相から「米国

参加に際して、「一方的に全ての関税撤廃をあらかじめ約束することを求められるものではないことを確認する」とある。最終結果は交渉次第であって、交渉参加の時点で全ての関税撤廃をあらかじめ約束する必要はないというやり取りにすぎないとし、「例外品目が認めら

---

## 訪問歯科 超 実践術 ⑱⑤

前田実男
（日本訪問歯科協会 理事）

歯科の訪問診療について5年、10年単位で振り返ってみると、明らかにトレンドという

介護者の口腔ケア」が注目されるようになり、訪問診療の現場での口腔ケアの技法を学びたいという歯科衛生士の数が目立って増えてきた。

日本の人口動態統計からは、2025年までは高齢者の数は増加の一途を続け、要介護の方も増え続ける。それに伴い訪問歯科のニーズもさらに高まってくることが予想される。訪問診療に取り組んでいる先生方や介護事業所の職員の方の声を聞くと、2～3年前から「介護者が行う口腔ケアについての指導」ばかりでなく「摂食

義歯が必要になる。先生方の話を聞くと、訪問診療の患者さんの場合、特に下顎の吸着義歯の作製が難しいケースが多いという。寝たきりで噛み合わせが難しい上に、意思の疎通が困難なため協力が得られず、どの先生も苦労をされているようだ。

訪問診療を2～3年続けて

ww.houmonshika.org

シェルジュ認定講座